

# スラム街の生活

～アフリカ最大のスラム、キベラの日常風景～



神奈川学園中学・高等学校  
岡本葵

## ■ 作品を通じて伝えたいこと ■

「アフリカ」や「スラム」という言葉を聞いて、日本に暮らす我々がイメージするものはなんでしょう？「貧困」？「不衛生」？あるいは「かわいそう」…？

多くの日本人にとって、「スラム」という言葉は聞いたことがあっても、それは実態のない遠い世界での出来事のように感じられてしまうのではないのでしょうか。しかし、そんな「スラム」に暮らす人々にも私たちと同じように朝が来て、夜が来ます。彼らもまた、私たちと同じように「生活」しているのです。

この作品を通じて、遠いアフリカの「スラム」に暮らす人々も、日々さまざまな工夫を凝らしながら日常を「豊か」に生きているということを感じてもらいたいです。また、こうしたスラムの現状は少なからず私たちの「豊かさ」の延長線上にあるものだという事とも同時に考えて頂けたら幸いです。

## ■ 活用できる場 ■

小中高を通じて、社会科や英語科などの教材に登場する「アフリカ」や「スラム」の素材は限られています。そこでは、スラムの全体像を示すような素材はあっても、そこで暮らす人々の日常生活にフォーカスをあてたものは少ないように感じます。この作品は、こうした現場実践で既存の教材と並行して活用されることで、より多角的にグローバルな文化・社会・経済についての理解を促進できると感じます。



## キベラスラム

キベラスラムは、ケニアの首都ナイロビ郊外に約4平方キロメートル以上に渡って広がる、アフリカ最大のスラムです。またその人口はケニア政府や国連でさえも正確に把握しておらず、20万人から200万人と諸説あります。高台からスラムを見渡すと、どこまでも屋根がつながって見えますが、その内部は13もの村に分かれています。



## ゴミの散乱

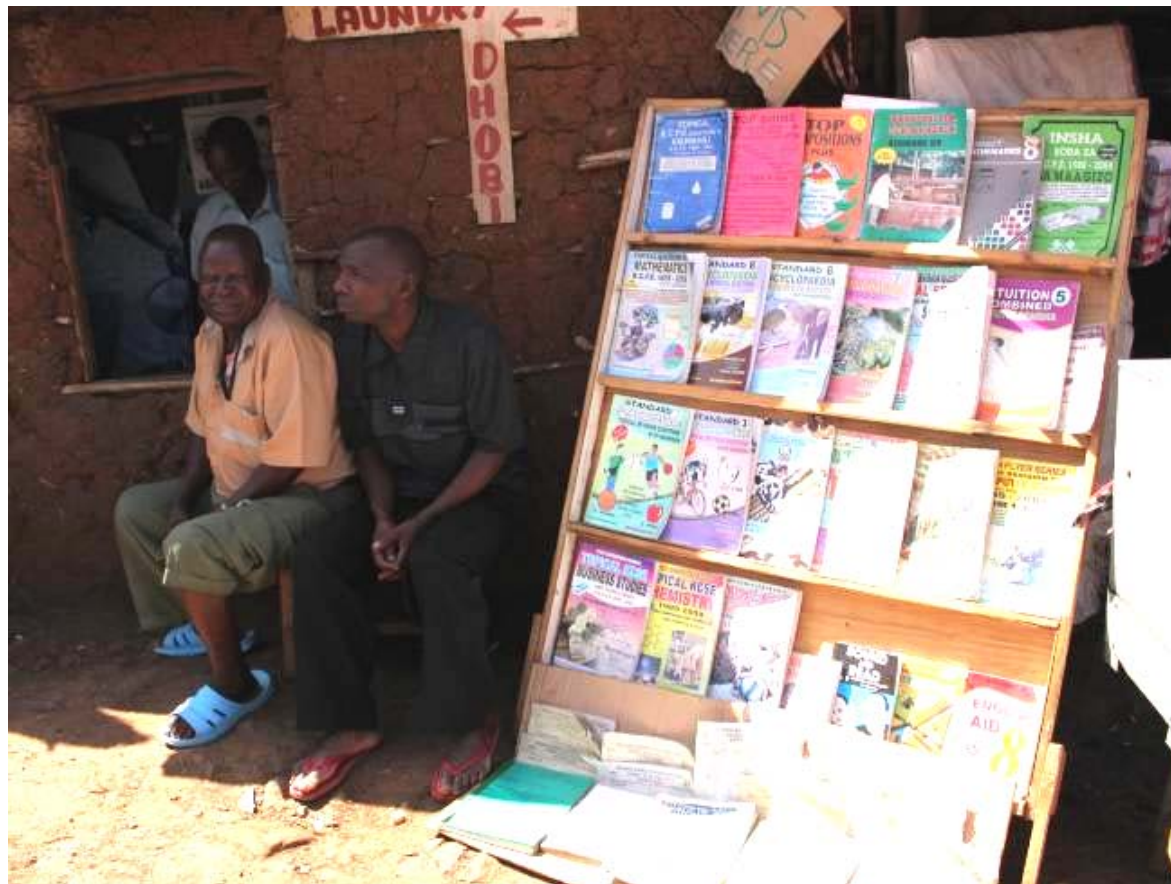
キベラには、いたるところにごみが散乱しています。これは、近年、急速に増加している先進国からのプラスチック製品の輸入に、国内のゴミ処理機能が追い付いていないことが最も大きな原因のひとつであると考えられています。



## スラムの学校

スラムで暮らす子供たちも全員ではないですが、学校に通っています。この学校でも、幼稚園から高校までの子供たちが一緒に勉強しています。

ケニアでは、日本の公立の小学校のように国が施設・教員を提供するわけではありません。そこでは、まずは地域が学校を作り、教員を集め、それが一定の基準を満たして初めて国からの支援が行われます。したがって、地域住民にあまり資金のないスラム内に学校を作るには、外部からの支援が必要です。



## 教科書販売

ここは何屋さんでしょうか？正解は、教科書屋さんです。ケニアは、日本人も驚くような受験国家です。小学校の段階でもある一定の教育水準に達していない場合は落第もあり得ます。一方で、良い教育を受けたものは社会で成功することができるという希望もあるため、人々の教育に対する思いはとても強いものがあります。スラムの中には、こうした教科書や参考書の販売を商売としている家もあります。



## 羊毛の織物工場

この職場では、お母さんたちが子供を連れて働いています。羊毛を紡ぎ、織物として製品化された品々は主に先進国へと輸出されます。



## サッカー試合の観戦場

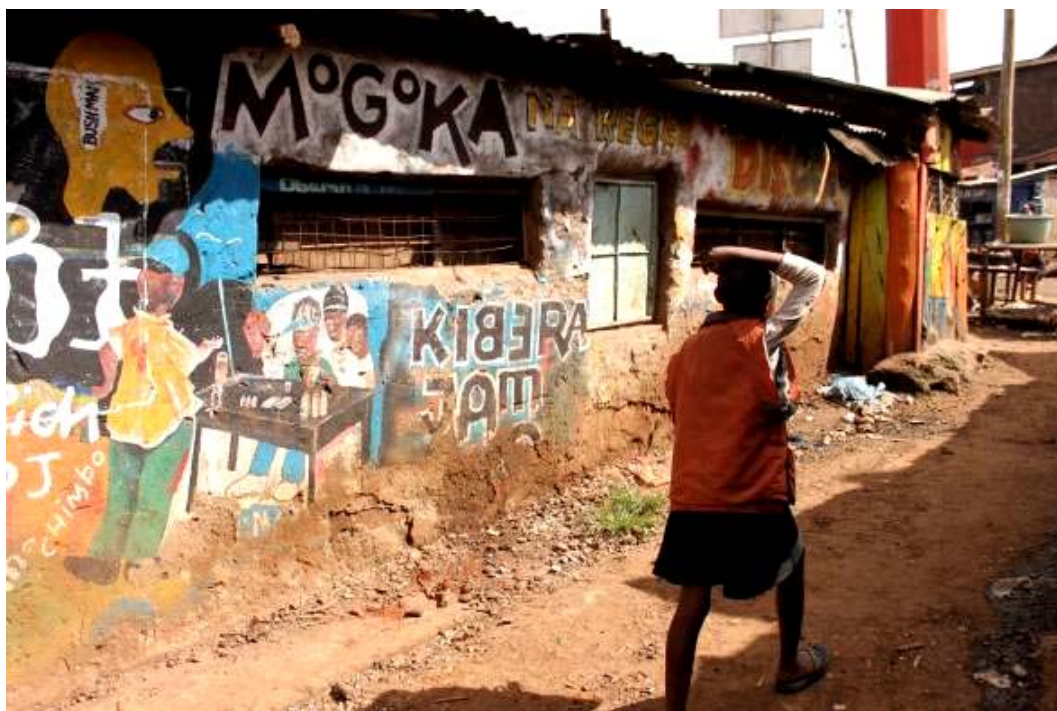
これは何のお知らせでしょうか？正解は、ヨーロッパのサッカー試合放送の予告です。サッカーが大人気のケニアでは、試合観戦は欠かせない娯楽の一つなのです。しかし、スラム内の家庭の中には、テレビを持っている家もありますが、その数はあまり多くありません。そこで、キベラスラムでは、テレビがある家が商売として試合観戦を行うということも行われています。





## スラムのカフェ

スラム内にあるお食事処です。マンダジと呼ばれる揚げパンを提供するこのお店は、朝食やおやつの時間帯に大人気です。



## 平和を願うグラフィティ

一見単なる「落書き」に見えるこれらのウォールペイントは、キベラスラムで暮らす若いアーティストたちによって描かれた「平和」を願うグラフィティです。ケニアでは、2007年の大統領選挙の後大きな暴動がおこり、ここキベラスラムでも多くの犠牲者を出しました。このグラフィティには、そのようなことが二度と起こらず、人々が平和に暮らせるようにという若者たちの願いが込められています。